

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02427

研究課題名(和文) 奈良仏教を中心とした東アジア文化交流に関する研究 渡来僧の活動と実態解明

研究課題名(英文) Study on East Asia cultural exchange mainly on the Nara Buddhism

研究代表者

金 任仲 (KIM, IMJUNG)

明治大学・研究・知財戦略機構(駿河台)・研究推進員

研究者番号：30599577

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、奈良時代に朝鮮半島からの渡来僧による仏教伝来をめぐって、日中韓の関連文献資料の比較分析を通して、どのように受容し展開され、奈良仏教成立と文化の発達に影響を与えていったかを明らかにした。また朝鮮半島からの渡来僧である慧慈・慧聪・恵便・慧灌・観勒・審祥など、彼らの活動状況と実態を調査し、東アジアにおける文化交流と伝播及び影響関係を考察し解明した。このために、各地に渡来僧に関わる地誌・縁起・金石文などを調査・収集するために、国内外でフィールドワークを実施した。これらの研究成果は、国内外の学会・研究会に参加して発表し、学術論文を日本語と韓国語で執筆して公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は奈良仏教における渡来僧の宗教活動や実態を仏教と歴史両面から研究するまったく新しい試みである。従来の研究では、奈良仏教成立において渡来僧に関する豊富な文献史料が存在したにもかかわらず、隋唐から移入された教学を基礎として南都六宗が成立したという観点から文献史料が用いられてきたことは事実である。そこで本研究では、記紀をはじめ、仏教典籍・古文書・縁起書・地誌などに記されている渡来僧の宗教活動や実態をめぐって、文献学的な立場から比較分析を行い、渡来僧による仏教伝来と受容・展開を解明し、奈良仏教成立と文化の発達のために及ぼした影響関係を考察し解明するという点で、一定の学術的意義や社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：This study clarifies how the introduction of Buddhism by monks from the Korean peninsula in the Nara period (710-794) was accepted and developed and how it influenced the establishment of Nara Buddhism and the development of culture through a comparative analysis of related documents in Japan, China and Korea. In addition, the author investigates the activities and actual conditions of the monks from the Korean peninsula, such as Eji, Eso, Eben, Ekan, Kanroku, Sinjou, and examined and clarifies the relationship between cultural exchange, propagation, and influence in East Asia. In addition, the author investigates the activities and actual conditions of the monks from the Korean peninsula, such as Eji, Eso, Ebin, Ekan, Kanroku, Sinjou, and considers and clarifies the relationship between cultural exchange, propagation, and influence in East Asia.

研究分野：仏教文学・日韓比較文化

キーワード：渡来僧 渡来人 慧慈 聖徳太子 恵便 慧灌 元暁 審祥

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

(1)日本の仏教公伝は、百済の聖明王、そして文字の伝来は百済からの渡来人王仁に代表されるのをはじめとして、政治・外交・宗教・経済のみならずあらゆる文化面において朝鮮半島からの渡来人たちの役割は、古代日本の社会の進展と文化の発達に大きな影響をあたえた。とくに朝鮮半島からの渡来僧をめぐって、聖徳太子の師となった慧慈をはじめ、慧聰・観勒・慧灌・智鳳・審祥など、彼らが奈良仏教成立において如何なる影響を与えているか、その活動と実態解明のために、『三国仏法伝通縁起』・『本朝高僧伝』を中心に調査・考察を進めてきた。南都六宗の成立は「正倉院文書」によると、南都六宗の名が初めて見えるのは、俱舎宗・法性宗・律宗が勝宝3年(752)、三論宗・花厳宗・成実宗は勝宝4年(753)であるから、少なくとも勝宝4年までには成立していたことを確認できる。

(2)従来の観点では、隋唐から移入した教学を基礎として南都六宗が成立したとされるが、しかし朝鮮半島からの渡来僧と渡来人の後裔たちが、日本仏教の母体ともいえる南都六宗の成立にあたって、極めて重要な役割を果たしたことは看過できない。奈良仏教成立期に新羅僧審祥の請来によって元暁の著書が日本に広く紹介されたことが窺われ、日本仏教における受容と展開について、今後関連文献の綿密な検討が必要になる。金任仲は以前から奈良仏教を中心とした渡来僧の活動や実態に関心を持ち、新羅僧審祥の来日の背景や審祥の多数の蔵書が東大寺に伝えられた経緯などについて、『東大寺要録』・『三国仏法伝通縁起』・古文書を中心に考察した。

(3)本研究では、今までの研究成果を踏まえ、奈良仏教を中心とした朝鮮半島からの渡来僧をめぐって、『東大寺要録』・『僧綱補任』・『三国仏法伝通縁起』・『本朝高僧伝』の他、多くの関連資料の記事を徹底して分析した上で、東アジア仏教文化圏における伝播及び影響関係を文献学的な立場から、渡来僧の活動と実態を解明するのが本研究の着想に至った背景である。

## 2. 研究の目的

奈良仏教と朝鮮半島との文化交流は渡来僧を媒介としており、朝鮮半島の仏教や国情が密接に関係している。いわば、高句麗・百済・新羅からの渡来僧は、古代日本へ仏教を伝えることを目的にしている。日本の仏教公伝以来、朝鮮半島の渡来僧は既に6世紀後半から始まっている。そこで本研究は、奈良時代に朝鮮半島からの渡来僧による仏教伝来をめぐって、記紀・『東大寺要録』・『延暦僧録』・『三国仏法伝通縁起』・『本朝高僧伝』・『海東高僧伝』など、日中韓の関連文献資料の比較分析を通して、どのように受容し展開され、奈良仏教成立と文化の発達に影響を与えていったか、渡来僧の活動状況と実態を調査し、東アジアにおける文化交流と伝播及び影響関係を考察し解明することを研究目的とする。

## 3. 研究の方法

(1)平成29年度は、史書・古文書・縁起書・『東大寺要録』・『三国仏法伝通縁起』・『本朝高僧伝』・『元亨釈書』などにみられる渡来僧に関する記述を渉猟し、解読をすすめる。東アジアにおける渡来僧の関連記事を検討するために、日本側の関連資料・古文書・縁起書・地誌と、中国側の資料『宋史』・『仏祖統記』・『宋高僧伝』と、韓国側の関連資料『海東高僧伝』・『三国史記』などを比較分析することにより、奈良時代の渡来僧の全体像が明らかになる。渡来僧関連資料の調査は膨大な典籍であるので、「高句麗からの渡来僧」・「百済からの渡来僧」・「新羅からの渡来僧」の研究テーマごとに分けて作業を行う。具体的には、古文書・縁起書・地誌や文学作品『万葉集』・『懐風藻』・『日本霊異記』などに見える渡来僧の関連記事

について、研究分担者堂野前と共同で資料収集・調査を行う。分担者堂野前は、古代日本文学における日本海地域の交易についての研究実績と経験を活かし、古文書・縁起書・文学作品の調査を担当することにより、本研究において重要な研究成果をもたらす。これらの成果は、今後の研究のために、データベース化して保存し、分担者と相互に交換していく。さらに、渡来僧と関わる国内外の各地域に残る寺院などを現地調査と資料収集を通して、渡来僧の活動状況や諸文献の該当箇所を集めたデータベースとして構築し分析をすすめる。

**(2)**平成 30 年度は、史書・仏教典籍・古文書・縁起書などにみられる渡来僧の関連記事を文献学的側面から検討する。まず「三宝の棟梁」と称された慧慈は、聖徳太子の仏教の師となり、帰国の際には太子の著『三経義経』を持ち帰ったという。慧慈は『三国仏法伝通縁起』に、三論宗の学問僧と記されており、『日本書紀』・『本朝高僧伝』・『元亨釈書』など、関連資料の分析を通して、来日の背景や活動、思想的影響を明らかにする。『伊予国風土記』逸文には、太子の「温泉頌」という「伊予湯岡碑文」が収められている。その碑文は、伊予国湯郡における太子と慧慈との交遊を示し、二人の交流の深かったことを窺い知る好個の資料であり、『風土記』・『釈日本紀』・『萬葉集注釈』・漢詩集などの該当文献を比較分析し、その全文を究明する。慧灌の日本渡来は、『日本書紀』と『東大寺具書』に記されているが、両文献の間に渡日時期や僧正に任命された経緯など、かなり相違点が有するため明らかにする。『三国仏法伝通縁起』には、慧灌は入隋して吉蔵に三論を学んで日本に渡来し、三論宗の祖となり、元興寺に住居しながら三論の大衆化につとめたとある。慧灌の宗教活動は、河内の井上寺・奈良の般若寺・群馬の永澤観世音などを建立したことから確認でき、奈良・大阪など現地調査と資料収集を通して、民衆教化や思想的影響を究明する。智蔵は、『扶桑略記』・『元亨釈書』などに福亮の在俗の子と見え、『懐風藻』目録に五言詩 2 首と略伝 1 篇が収められている。福亮・智蔵については、『僧綱補任』・『本朝高僧伝』・『元亨釈書』などにも見え、関連資料の分析を通して、彼らの伝記と実態を明らかにする。

**(3)**令和元年度は、渡来僧に関連する史書・仏教典籍・古文書・縁起書と、韓国側の資料『海東高僧伝』・『三国史記』、中国側の資料『宋史』・『仏祖統記』などと総合的に比較し検討する。また朝鮮半島からの渡来僧による仏教伝来と受容・展開を明らかにし、本研究を完成させる。観勒は推古天皇 10 年(602)に来朝し、天文・地理・遁甲・方術の書物を献上し、書生に教育をさせているが、そのうち、遁甲・方術という道教思想の影響に注目し、受容と展開を解明する。さらに観勒は、日本で最初に僧正に任命されている点から、当時の日本と百済の僧官制度とを比較分析し解明する。道昭は法相宗第 1 伝とされ、『続日本紀』『三代実録』と、中国側の資料『宋史』『仏祖統記』などに道昭伝が見え、これらを比較分析し、道昭の伝記と思想を明らかにする。審祥は、勅命により金鐘寺において華嚴経講説の初代講師となり、華嚴宗伝来の初祖とされた。今後、『東大寺要録』『三国仏法伝通縁起』を中心に関連資料の調査・分析を通して、審祥の出自と法系及び典籍伝来の問題を考証する。

#### 4. 研究成果

**(1)**奈良時代には、すでに新羅僧元暁(617~686)の著作が日本に請来し書写されたが、それは石田茂作氏の「奈良朝現在一切経疏目録」によって知られるところである。その中で元暁の著書と判明されるのは、重複する文献名を含めて 81 部 119 巻という膨大な分量に及んでおり、奈良仏教成立において元暁の影響が如何に大きかったかを十分察することができるのである。諸文献に現れる元暁の著作は、107 種 231 巻と判明されているが、現存するものはわずか 22 種 27 巻にすぎない。元暁の代表的な著作は、『金剛三昧経論』『大乘起信論疏』

『華嚴經疏』であると言えるが、彼の著作目録の中に最も中心的な分野は、唯識系と律学系、そして『大乘起信論』にかかわるものである。元暁の思想は、韓国仏教だけでなく、日本・中国の仏教にも大きな影響を与えた。日本における元暁の著作は、法相宗・華嚴宗・天台宗・浄土宗など、宗派を超えて多くの書物に引用されている。鎌倉時代の華嚴僧明恵（1173～1232）は、新羅僧である元暁と義湘を「華嚴宗の祖師」として尊崇の念を抱き、『華嚴縁起』（国宝、『華嚴宗祖師絵伝』とも称される）という絵巻を制作した。また親鸞（1173～1262）が著した法然の言行録である『西方指南抄』などにも、元暁を「華嚴宗の祖師」として記されている。金任仲は、延世大学と修道寺主催の「元暁誕生 1400 周年記念国際学術大会」（2017 年 11 月 17 日・平澤・修道寺講堂）に参加し、華嚴宗・浄土宗関連文献を中心に元暁が日本において「華嚴宗の祖師」として称された経緯について研究発表を行った、（『淵民学志』29 輯、2018 年 2 月）。

**(2)** 鎌倉時代の華嚴僧明恵が制作されたという『華嚴縁起』の「元暁絵」の冒頭に「鬼」の姿が描かれている。元暁は夢の中で鬼の出現によって、分別があれば仏法は生じ、心がなければ仏法は滅ぼすことに気づいて悟りを開いた。日本における鬼の変化を古代日本文学や絵巻の中に辿ってみると、鬼とは目に見えない「もの」であったが、漢訳仏典に語られる獄卒の姿などの影響を受けて、いわゆる現代の我々が想像する鬼の姿になった。研究分担者の堂野前彰子は、「元暁誕生 1400 周年記念国際学術大会」に参加し、元暁絵に鬼が描かれた背景には、明恵の母なるものへの思慕と確執があったと考え、日韓古典文学に登場する「鬼」について、比較・検討し研究発表を行った（『淵民学志』29 輯、2018 年 2 月）。

**(3)** 高句麗僧慧慈・慧灌と関わりがある寺社と遺跡の調査を行った。四天王寺は、推古天皇元年（593）聖徳太子が建立した日本で初めての官寺である。四天王寺は中門（仁王門）、五重塔、金堂、講堂が南北に一直線に並び、中門と講堂を結ぶ回廊が五重塔と金堂を囲む形式になっている。この形式を四天王寺式伽藍配置と言い、百済の寺院に多く見られる。大阪府枚方市にある百済王神社は、660 年百済滅亡後、そのまま日本に残留した百済王族・善光（禅広）は、朝廷から百済王氏の姓を賜り、その曾孫にあたる百済王敬福は陸奥守に任ぜられ、749 年陸奥国小田郡で黄金を派遣し、東大寺大仏造営のため黄金 900 両を朝廷に献上した。その他、東漢氏の後裔である「坂上田村麻呂の墓」（京都市山科区）を参拝し、聖徳太子建立の日本七大寺の一つである広隆寺、秦氏ゆかりの「大酒神社」、百済系渡来人出身の良弁を開基とする石山寺、推古天皇 14 年（606）、聖徳太子と慧慈が建立したと伝わる百済寺などを見学した。今回の播磨国の現地踏査を通して得られた資料は、学会発表及び研究論文の執筆のとき大いに役に立った（2017 年 6 月 10 日～6 月 12 日）。

**(4)** 古代日本と朝鮮半島との交流は、6 世紀から 7 世紀にかけてより活発になり、こうした国家的外交や文化交流として、渡来僧による仏教の伝播と普及が積極的に行われた。仏教伝来期において、朝鮮半島からの渡来僧は慧慈をはじめ、慧聰・觀勒・曇徴・慧灌・審祥など、相次いで日本に渡って来るようになる。とりわけ高句麗僧の慧慈は、推古天皇 3 年（598）日本に来朝し、同 23 年（615）に帰国するまで、20 年間にわたって滞在し、百済の慧聰と共に「三宝の棟梁」と称された人物である。若き日の聖徳太子（574～622）の仏教の師となり、精神的・思想的な深化に最も大きな影響を与えたのは、やはり高句麗僧の慧慈ではなかったかと考えられる。金任仲は、高句麗僧の慧慈と聖徳太子との交遊をめぐって、『日本書紀』『元亨釈書』『三国仏法伝通縁起』などに見える慧慈の関連記事を通して、韓国と日本との仏教文化交流という点に注目しながら、慧慈と聖徳太子の仏教思想について考察した（『淵民学志』31 輯、2018 年 2 月）。

(5)日本仏教の草創期に来朝し、大きな足跡を残しているのは高句麗僧恵便である。兵庫県加古川市にある鶴林寺は恵便法師を開山とするが、その寺伝によると、聖徳太子は恵便法師の教えをうけるためこの地に来たと具体的に伝わっている。鶴林寺は崇峻天皇2年(589)聖徳太子が側近の秦河勝に命じ、仏教をひろめるための道場として建てられた仏堂が、鶴林寺の起源であるといわれる。播磨にはこうした恵便法師を開基と伝える寺がほかにも存在する。聖徳太子が恵便に命じ、建立したという随願寺(姫路市)があり、恵便が坐禅したと伝わる奥山寺(可西市)もある。また物部氏が無理やり還俗させた後、恵便を幽閉させた、その館がそのまま寺になったという安海寺(多可町)があり、相生市瓜生の岩窟には、釈迦如来を中心に十六羅漢の石仏は恵便が彫ったという伝承がある。今も鶴林寺と安海寺には、平安時代に造られたといわれる恵便法師の木像が残されている。このように播磨国には、恵便にまつわる様々な伝説が残っていることが分かった(2019年5月13日~5月16日)。

(6)百済の聖明王から仏教が公伝されたのは、欽明天皇13年(552)壬申とする『日本書紀』と、欽明天皇7年(538)戊午とする『元興寺伽藍縁起并流記資材帳』『上宮聖徳法王帝説』との二系統の史料があり、年代をめぐる見解の相違がある。いずれにしても、仏教が朝鮮半島を通して日本に伝わる以前に、すでに私的な信仰として渡来系氏族・渡来人を中心に仏教受容の体制が築かれつつあった。推古天皇2年(594)2月、女帝によって聖徳太子と蘇我大臣馬子に対し、三宝興隆の詔が下され、翌年五月に高句麗僧の慧慈が来朝し、聖徳太子の仏教の師となった。太子22歳の年である。若き日の太子と慧慈との交遊を窺い知る「伊予湯岡碑文」は、『伊予国風土記』逸文に収められている貴重な史料である。金任仲は、高句麗から慧慈が派遣された背景には、隋の勃興や新羅の脅威という緊迫した東アジアの情勢が大きく関係していると思う。金任仲は、高句麗僧の慧慈と聖徳太子との関わりについて、『日本書紀』『元亨釈書』『三国仏法伝通縁起』などを参照しながら、「伊予湯岡碑文」を中心に考察してみた(『文芸研究』139号、2019年9月)。

(7)高句麗僧の慧灌(595?~685?)は、早くから入隋して中国の吉蔵(549~623)に師事して三論教学を学んだ。慧灌は推古天皇33年(625)正月に高句麗の栄留王(在位、618~642)の命を奉じて来朝した。高句麗から来朝した慧灌は、その年の夏に旱魃があり、三論を講じて祈雨し大雨を降らせた功によって、ただちに僧正に任ぜられた。このような重い処遇を最初から受けている点から、日本の切なる招請によるものと考えられる。しかし、慧灌以前に三論学の学僧と目される人が、日本に全くいなかったわけではない。飛鳥時代の推古天皇3年(595)5月に来朝し、聖徳太子の仏教の師となった高句麗僧の慧慈や、同じ年に来朝した百済僧の慧聰は、翌年に完成した日本最初の大伽藍である法興寺に住し、二人は「三宝の棟梁」と称された。また、推古天皇10年(603)に百済から観勒が渡来し、天文・暦本・地理・遁甲・方術の書を伝えた。彼は推古天皇32年(624)日本で最初の僧正となった。その後、慧灌を経て福亮に至るまで九人の僧正は、すべて法興寺に拠点をおく三論僧の出身であった。中国では隋代に吉蔵が三論宗を大成したが、唐代以後は華嚴宗や法相宗の隆盛の陰に隠れ、衰運をたどったが、かえって日本では盛んになったのはやはり慧灌に端を発したと言えるだろう。金任仲は、高句麗僧の慧灌をめぐる、『扶桑略記』『三国仏法伝通縁起』『本朝高僧伝』などに見える慧灌の関連記事を中心に、三論宗の日本伝来を検討した上で、慧灌の伝記と宗教活動の実態を考察した(『淵民学志』33輯、2020年2月)。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 金任仲	4. 巻 33輯
2. 論文標題 「日本三論宗祖師の慧灌 三論宗の伝来と宗教活動を中心に 」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『淵民学志』	6. 最初と最後の頁 385～418
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金孝珍	4. 巻 第2巻1号
2. 論文標題 「新羅と古代日本における仏教の伝来 - 受容をめぐる摩擦と女性の役割を中心に 」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『中央学院大学現代教養』	6. 最初と最後の頁 49～75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金任仲	4. 巻 139号
2. 論文標題 「高句麗僧慧慈と聖徳太子 「伊予湯岡碑文」を中心に 」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『文芸研究』	6. 最初と最後の頁 123～143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金任仲	4. 巻 31輯
2. 論文標題 「高句麗慧慈と聖徳太子の交遊」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『淵民学志』	6. 最初と最後の頁 157～193
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 袴田光康	4. 巻 719
2. 論文標題 平安時代の庭園と歌合	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『月刊考古学ジャーナル』	6. 最初と最後の頁 32～33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 袴田光康	4. 巻 春風社
2. 論文標題 「古代庭園文化の受容と翻案 寝殿造庭園と「名所」の発生」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『翻訳とアダプテーションの論理』	6. 最初と最後の頁 329～355
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金孝珍	4. 巻 26
2. 論文標題 「『周生伝』に見える西湖世界」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『古代学研究所紀要』	6. 最初と最後の頁 23～34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金任仲	4. 巻 29輯
2. 論文標題 「日本華嚴宗祖師の元暁 華嚴宗祖師と呼ばれた由来を中心に」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『淵民学志』	6. 最初と最後の頁 113～140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 堂野前彰子	4. 巻 29輯
2. 論文標題 「『華嚴縁起』に描かれた「鬼」」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『淵民学志』	6. 最初と最後の頁 141～177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堂野前明子	4. 巻 美浜町歴史シンポジウム記録集12
2. 論文標題 「若狭国日向神話」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『耳別氏、若狭に起つ 若狭の古代豪族、耳別氏を考える』	6. 最初と最後の頁 59～74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 金任仲
2. 発表標題 「高句麗慧灌と三論宗の伝来」
3. 学会等名 東アジア文化交流第11回国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金任仲
2. 発表標題 「埼玉県の高麗神社と聖天院」
3. 学会等名 モーレイ育英会（招待講演）
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 金任仲
2. 発表標題 「古代の朝鮮半島から渡来人」
3. 学会等名 モーレイ育英会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金任仲
2. 発表標題 「日本華嚴宗祖師・元暁について」
3. 学会等名 湧上古典研究会（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 金任仲
2. 発表標題 「古代日本と渡来人の活躍 その交流の軌跡 」
3. 学会等名 モーレイ育英会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 金任仲
2. 発表標題 「日本華嚴宗祖師・元暁について」
3. 学会等名 湧上古典研究会（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 堂野前彰子
2. 発表標題 「『華巖縁起』に描かれた「鬼」」
3. 学会等名 洵上古典研究会（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 堂野前彰子
2. 発表標題 「若狭国の日向神話」
3. 学会等名 NPO法人 サンフラワー21
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 袴田光康・小二田誠二	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 75～85
3. 書名 古典文学に描かれた静岡	

1. 著者名 金任仲・許敬震	4. 発行年 2018年
2. 出版社 民俗苑	5. 総ページ数 291
3. 書名 『華巖縁起 元暁絵・義湘絵』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	堂野前 彰子(岡本彰子)  (DONOMAE AKIKO)  (50588770)	明治大学・研究・知財戦略機構・研究推進員    (32682)	
研究分担者	袴田 光康  (HAKAMADA MITSUYASU)  (90552729)	静岡大学・人文社会科学部・教授    (13801)	
研究分担者	金 孝珍  (KIM HYOJIN)  (20638986)	明治大学・研究・知財戦略機構・研究推進員    (32682)	